Myanmar-Japan Collaboration Project for Fostering Medical Human Resources

ミンガラバー こんにちは

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL：086-224-0102
FAX：086-221-2554
URL：http://www.mjcp.or.jp

ミャンマー医学教育強化プロジェクト

12人の医学博士 誕生

岡山大学などで学ぶ

将来のミャンマー医療を担う人材を育成する岡山大学など6大学の「ミャンマー医学教育強化プロジェクト」が計画を終えた。修了式が8月6日、ヤンゴンであり、医学博士号を取得した医師や医療技術を習得した医師、技師ら計67人が集った。

岡山、千葉、新潟、金沢、長崎、熊本の6大学が連携して実施。事業費約4億円のほとんどをJICA（国際協力機構）が負担した。

各大学の基礎系博士課程で、ミャンマーの若手医師が2人ずつ4年間学び、12人全員が博士号を取得。また各大学の臨床系では医師や技師ら計55人が約3か月、画像診断や救急麻酔などの技術を習った。

修了式には、プロジェクトの計画段階から関わってきた協会の岡田茂理事長、中心になって推進した協会理事の木股敬裕・岡山大教授が出席。金澤右・岡山大病院長、さらに丸山市郎・駐ミャンマー大使、JICAミャンマー事務所の唐澤雅幸所長、ミャンマー側からはテッカインウィン保健スポーツ省次官が祝辞を述べた。

昼食会では日本ミャンマー協会の渡邉秀央会長（元郵政相）が挨拶で「プロジェクトはぜひ続けて欲しい」と述べた。6大学とJICAでは、日本で学んだ若者がミャンマーの医療教育現場で活躍できる支援策を考えており、またプロジェクトの継続にはどんな方法があるかを検討中という。

修了式の後、医学博士号を取得した12人はヤンゴン第一医科大学長（中央の男性）とミャンマー保健スポーツ省の局長（その右の女性）と一緒に記念撮影＝ヤンゴンのパンパシフィックホテル

岡山大学で医学博士号を取った2人に研究や日本の印象などを書いてもらった。

マンダレー医科大

ヘインミンラッさん

気さくな環境で研究でき幸せ

岡山大学の生理学研究室は教授、私の指導者、別の2人の教員、2人の秘書と1人の技師でした。松井秀樹教授はユーモアのセンスに溢れた素晴らしい好男子だったし、指導者の松下博昭先生は親切で、はずかしがり屋。他の先生も親切で、思慮に富んだ人でした。技師、秘書さんは英語が話せ、私の日本での生活の大きな助けになりました。もう1人の秘書さんは私を寛がせるために骨を折って下さった。気さくな環境で勉強できたことはとても幸せでした。

研究室で最も忘れられない出来事は、私の誕生祝をこっそりと準備して下さったこと。あれが生まれて初めての誕生日ケーキでした。現在は、教授は退職、他の皆さんも別の職場に移り、もう一度研究室を訪ねる機会があっても、もう同じではないでしょう。

協会の岡田茂理事長に初めてお会いしたのは協会の総会の時でした。先生の名前は何度も聞いていました。というのは先生は「ミャンマー教授」として知られており、何度も何度もミャンマーを訪問し、沢山の支援活動に参加されていたからです。私が驚いたのは最初に会った時でも既にミャンマーを80回も訪問していたことでした。医療と医学教育のための事業を行っておられることに強い感動を覚えました。

協会員の豊田博先生はチキンレストランにミャンマーの学生を招いての食事会を毎月開いて下さいました。私はそこで先生の大きな焼酎の瓶から1杯、時に2杯を味わいました。

他にも岡山で親切を受けたり、助けたりして下さった人の数は数え切れません。岡山で会った人たち、それは店員さんであれウェイターさんであれ、皆さん親切で、思いやりがありました。今では、日本がどのようにして第2次世界大戦の廃墟の中から立ち上ったのか理解できます。

岡山での日々を本当に懐かしく思います。岡山にもう一度でかけ、皆様に会いたいと思います。

ヤンゴン第二医科大

ソゥソゥトウェさん

将来的な視野、広がりました

私は薬理学教室の西堀正洋教授のもとで博士課程を修了しました。

私は外国で勉強したいという大志を抱いていました。この夢がかなった日本での生活はきつく、ストレスも多かったが、将来的な経歴には貴重なものでした。国際会議や集会に出席する機会も得て、これは将来的な視野を広げるのに役立ちました。

日本は多くの旅行者を引き付ける非常に美しい国です。休みには旅行したり、写真を撮ったりして楽しみました。桜の季節には先生や友達とお花見を毎年楽しみました。桜の花は1、2週間ももたずに散ってしまいます。これは日本の季節感覚ではとても重要な姿です。私もつい人生の移り変わりを比較してしまいました。

日本人は先祖から引き継いだものにプライドを持っており、食べ物さえも彼らの文化的な遺産の表現の道具として使っています。料理法の細部にもこだわり、これで食べ物の味に大きな意味を持たせています。

日本人は評価を得ることと評判を気にします。例えば他の人の要求を断れば、評判が悪くなるかもしれない。だから、要求に応えることができない時は、はっきり拒絶するより「それはすこし難しいね」とか「考えておきます」という事が多いようです。これは社会の調和を考えるときには重要だと思います。

日本にいる時に出会った多くの先生や友達はいらだたしさとは無縁の親切な教えと、不寛容とは無縁の理解力でもって接して下さいました。大変感謝しております。

寄付クリニックを点検

総会　今年度の事業計画決まる

年に1回開く協会の総会が、今年は7月27日夕、岡山市中区の岡山プラザホテルであった。向こう1年間の事業計画と、それを実施する予算が決まった。

総会へ出席の協会員ら＝岡山プラザホテル

会員約50人が出席。約240人から議決一任の委任状が寄せられた。総会では2018年度（18年7月～19年6月）に実施した事業と会計報告、19年度（19年7月～20年6月）に予定している事業計画と一般会計、特別会計を合わせて2,470万円の予算案がいずれも承認された。

19年度事業の多くは、これまで取り組んだ支援活動を継続する。ミャンマー医学研究大会への出席、岡山大学とミャンマーの医科、歯科、看護大学などの学生交流の支援、医師や看護師、助産師、臨床工学士など医療スタッフの研修などだ。

その一方、一区切りする事業もある。理事の西山央子さんが設立した奨学金制度「あかね基金」による準助産師育成は今年秋に研修を終える5期生で、5年間に毎年20人ずつ、計100人の育成という目標を達成する。1～4期生は出身地などに帰り、母子衛生の向上の力になっている。協会としてこの成果を点検し、さらに充実させる支援を検討する。

協会員らからこれまでミャンマーへ贈られた寄付クリニックは計17か所。それぞれの地域で医療センターの役割を果たしているが、この際、診療状況を把握し、医療機器や備品などの要望があればできるだけ対応。クリニックの中には建築して10年前後経っているものもあり、補修が必要ならそれも行う。

総会のあとには恒例の懇親会。ミャンマーから岡山大学に留学している学生9人と社会福祉法人旭川荘（岡山市中区）で介護福祉を学ぶ4人が招待され、協会員と懇談した。

ミャンマーの留学生の中には日本の浴衣姿も

越宗さんと長塚さん　協会の新理事に

協会の新しい理事に7月、越宗孝昌さん（山陽新聞社会長）と長塚仁さん（岡山大学教授＝口腔病理学）が就任した。

理事の皆木省吾さん（岡山大学教授＝咬合・有床義歯補綴学）と八代尚巳さん（岡山放送役員）の2人は退任した。

理事長を含む理事19人と監事2人の体制は変わらない。

2019年度予算

〔収入の部〕　　（単位円）

費　目	予算額		説　明
	一般会計	特別会計	
繰越金	5,189,801	4,655,101	前年度より繰越
会費・入会金	1,850,000	0	会費170人、入会金10人 賛助会費10人 役員運営協力金20人
寄付金	5,000,000	5,000,000	一般寄付金、運営協力費
助成金	3,000,000	0	永山積善会、渋谷育英会、その他
雑収入	50,000	0	預金利子、協賛金等
合計	15,089,801	9,655,101	

〔支出の部〕

費　目	予算額		説　明
	一般会計	特別会計	
事業費	7,500,000	6,000,000	**一般会計** ミャンマー医療人の研修・研究支援に関する事業5,000,000 公的機関と協力して支援する事業500,000 ミャンマーにおける医療実践を支援する事業1,500,000 組織活動の公表に関する事業500,000 **特別会計** あかね基金活動費4,000,000、MAJA-岡山、クリニック寄付2,000,000
会議費	250,000	0	総会懇親会・役員会等
旅　費	750,000	0	出張旅費
光熱水費	100,000	0	電気、ガス、水道代等
通信運搬費	500,000	0	電話代・インターネット使用料等
消耗品費	200,000	0	事務用品
印刷費	50,000	0	総会資料印刷代
諸謝費	50,000	0	講演等謝礼
負担金支出	20,000	0	岡山県国際団体協議会等負担金
支払手数料	50,000	0	郵便振替手数料等
委託料	450,000	0	会計事務委託、決算書作成委託料
賃貸契約料	750,000	0	賃貸契約に基づく固定資産税
予備費	4,419,801	3,655,101	
合計	15,089,801	9,655,101	

1期生18人の成果を調査

医療機器人材の育成

ミャンマー初の医療機器管理人材（メディカルエンジニア）の育成プロジェクトが2年目に入った。プロジェクトを中心になって進める岡山大学、日本臨床工学技士会、JICA（国際協力機構）などの関係者が8月4日、首都ネピドーを訪れ、保健スポーツ省のテインティンレイ医療人材局長らと協議した。その結果、①1年間の研修を終えて総合病院に勤務する1期生18人について、どんな成果をあげているか追跡調査する②2023年にヤンゴン医療技術大学に新設される予定の医療工学士学科の教員はこのプロジェクト修了生の中から日本で教育することを確認した。

ミャンマーには最新の医療機器を操作、保守管理できる専門の技術者がこれまでいなかった。このため去年、日本側の支援で毎年18～20人ずつ、5年間で約100人を育てるプロジェクトがスタート。1期生はヤンゴン、北オカラッパ、ネピドー、マンダレーの4総合病院に配属されている。

日本で教員養成

この1期生の中から優秀な2人を来春、臨床工学技士養成のマスター課程のある東亜大学（山口県下関市）と岡山理科大学に招いて2年間勉強してもらう。引き続いて今年の2期生の中からも3人の教育を予定している。

岡山大学で勉強　3医科大の20人

心臓マッサージの勉強をする学生＝岡山大医学部

4月にヤンゴン第一、第二とマグエーの3医科大学の3年生11人が岡山大学医学部3年生の授業「基礎病態演習」に参加し、病気の基礎的な仕組みについて学んだ。旅費と滞在費を協会と岡山県医師会が支援した。

5、6月にはヤンゴン第一、第二医科大の5年生9人が岡山大の基礎系教室で学んだ。解剖、病理、生化学、免疫などに分かれて指導を受け、それぞれのテーマについて発表。全員で臨床の入門的なことも勉強した。

岡山大とミャンマーの学生交流事業の一環で、4年目。岡山大で学びたいという学生が非常に多い中で、選考したという。

編集後記

表ページの写真をよくご覧ください。岡山大などで医学博士号を取ったミャンマーの医師12人が勢ぞろい。女性の姿が目立ち、男性は3人しかいません。そういえば、これまで協会の招きなどで来日し、研修した医師も大半が女性でした。ミャンマーの医師の男女比は3対7とのことで、これは昔も今もほぼ変わっていないそうです▼協会の総会でヤンゴン在住の理事笠井裕一さん（元三重大学教授＝脊椎外科）が最新のミャンマー医療事情について話しました。都市部では富裕層が増え、この人たちには健康志向がみられ、人気の韓流ドラマの影響で美顔・美白にあこがれる若者が増えたとか。これは、変わるミャンマーの一面でしょう。（西﨑）